

# 第107回漢方医学フォーラム

## 「逃げない医療」、いかに存続させるか

2月16日にメディアに向けて開催された漢方医学フォーラムでは、渡辺賢治氏（慶應義塾大学医学部漢方医学センター）が講演。漢方の良さ、医療現場でもっと活用する方法について論じた。

◆科学的ではなく全人的  
30年前には一般的だった家庭医が減り、専門外の病気に対しては紹介状を書く現状がある中で、漢方は「逃げない医療」と紹介した渡辺氏は、「漢方・鍼灸は患者の全体の

バランスを見るアトピー性の高い医学。科学的ではないため教育も治療効果の研究も遅れているが、患者を全人的に診る医師が多い」と語った。

◆現代医学の限界をカバーする可能性  
また現代医学のがん医療に触れ、「漢方・鍼灸はがんそのものを叩いて治療することはできないが、抗がん

渡辺氏講演する

また現代医学のがん医療に触れ、「漢方・鍼灸はがんそのものを叩いて治療することはできないが、抗がん

剤の副作用を減らして免疫力をあげ、治療効果を高める効果が期待できる。西洋医学の限界をカバーする可能性を持っている」と述べた。

◆医師の漢方そのものに対する理解不足が原因  
「なぜ漢方がもっと活用されないのか」について渡辺氏は、エビデンス（薬効の科学的根拠）の不足を指摘。

「インフルエンザに対しては、タミフル単独または麻黄湯との併用よりも、麻黄湯を単独で服用した方がより高い治療効果が得られた試験結果があるが、あまり表に出て

いない。今回の新型インフルエンザ流行に際しても漢方が使用されなかった。医師の漢方そのものに対する理解不足と、エビデンス確立のための研究費支援の少なさがあ

◆生薬に工業製品の薬価ルールは不合理  
生薬の薬価基準の問題についても「前回の薬価基準を越えない」とする薬価基準ルールは、工業製品である新薬に対しては合理性があるものの、農作物でもある生薬には価格に変動があり、同等に扱うことは不合理」と強く訴えた。

◆国民のために守る漢方  
また昨年の11月に行われた行政刷新会議ワーキンググループによる事業仕分けにも触れた。漢方

薬が市販類似薬の一つにさりげなく含まれたことに対して94万4千名あまりの反対署名が集まり厚生労働省に提出したことや、結果として漢方薬は引き続き保険適用薬とされたこと、このような漢方の保険はずしは過去にも何度か繰り返されてきたことを紹介し、「漢方は医者のためでもなく、学会のためでもなく、業界のためでもなく、国民のためになければならない」と自身の考えを述べた。

◆エビデンスへのチャレンジ「データマイニング」  
漢方のエビデンスの研究手法については、「無作為化二重盲検試験は、膨大なデータを集めるのがコストと時間がかかるが、AよりBが効果が高いとする仮説の証明以外

の分析には用いない。患者個々の愁訴と主観を重視する漢方には不向きな手法」と指摘。渡辺氏が現在推進している「データマイニング」という手法を解説し、「大規模なデータベースから発見されたパターンやルールを蓄積し学習する新たな知識の生成に達成した」と紹介した（詳しくは前号「漢方・鍼灸を活用した日本型医療の創生のための調査研究」記事）。

◆国策としての取り組みとブランドデザインを  
漢方の存続と課題解決については厚生労働省、文部科学省、経済産業省、外務省など様々な省庁にまたがっているため、ブランドデザインを描くことや、国策として取り組む必要性を訴えた。